

吉田松陰と平戸街道

澤 正明

江戸時代、長崎は海外に開いた唯一の窓でした。長崎と小倉の間の長崎街道は異国の文化に触れるために多くの人々が行き来しております。

平戸街道は彼杵宿で長崎街道より分岐し、田平町日ノ浦まで約十五里（六〇キロメートル）の道程です。

街道は特別の所以外はなるべく直線コースになるよう設定してあり、特に佐世保周辺は山坂が険しく難所でした。ここを歩いた「吉田松陰」は「西遊日記」に「十三日、雨。早岐より佐世保浦へ二里、浦より中里へ二里、中里より江迎へ四里、共に八里。皆（二里は）五十町」と云う。夜に入り江迎に着し、庄屋の家に投宿す。是の日の艱難実に遺忘すべからず。一には八里の間、皆山坂險阻の地なり。二には雨によりて途中傘を買い煩を添う。」と記しており、険しい山坂で難渋している様子が鮮明に描かれております。嘉永三年（一八五〇）九月のことです。



大村そへはた。管保家の（みね）の石標。藩の（へ）の標。峰の（ノ）の標。船とこ

家の養子となり、十九歳のときには山鹿流軍学の師範となっております。

二十一歳になった松陰は平戸遊学を願ひ出ておりますが、目的は山鹿流兵学の本宗である平戸の兵学を履修することでした。平戸では山鹿万介・葉山佐内が家学の教授をうけ、滞在した五十余日の間に読破した書物は八十冊をこえております。

平戸遊学より帰つてのち藩主の参勤交代に随行し、松陰は江戸で佐久間象

山に洋学を学びます。象山の影響で「海外に脱出して進んだ文明の知識を求めめる」との志で下田に停泊の米艦に密航を求めて失敗、捕らえられ、江戸から萩の野山獄に送られます。出獄を許され謹慎中に「松下村塾」

を開きますが、この塾から高杉晋作をはじめ数多くの人材が輩出したことはよく知られております。

松陰の願ひは「自分に代わって思想し行動する時代の変革者を育て上げる」ことにあり、その目的は「若い層の人造り、ひいては強健な国造りへの道」でした。それは明治維新に実を結ぶことになりまます。松陰は安政の大獄に連座して刑死しました。享年三十歳、安政六年のことです。

松陰は文政十三年八月（一八三〇）、

杉百合之助の次男として生まれました。のちに萩藩の山鹿流兵学を講ずる吉田